論　文

子どもの自己主張をめぐる母親の育児上の悩みと不安

―教育相談における家庭支援に向けた基礎的研究[1)]

渡辺 忠温[a)]　竹尾 和子[b)]　渡部 朗代[c)]

要旨：子どもたちの抱える問題に対して学校と家庭が連携して対応し、教育相談等の場を通じて、学校が家庭における育児・子育てへの支援を積極的に実現していくためには、両者の間での相互理解が必要となる。本研究では、そうした相互理解の基盤となるものとして、縦断的なインタビュー調査における母親たちの育児に関する悩み・不安についての語りの内容の分析を行った。インタビュー調査は、7組の親子の母親に対して、子どもが2歳から5歳1か月までの期間にわたって行われた。インタビューの語りの分析結果からは、母親の育児に関する悩み・不安の対象となるものとして17のカテゴリーが見出され、それらはさらに4つの観点からまとめることができた。また、母子を取り巻く人間関係や環境は、母親に悩み・不安を生じさせる主要な要因のひとつであると同時に、母親に援助を提供するものでもあり、母親の悩み・不安にとって正負両側面を併せ持つ安定的な構造であることが示唆された。

キーワード：育児不安、教育相談、幼児、自己制御

問　題

不登校やいじめなど現代の学校が抱える子どもの多様な問題に対しては、学校の教師やスクールカウンセラーなどによる指導や援助だけでは十分ではなく、保護者や地域との連携による対応が必要である（上村・石隈，2010）。また、家庭環境の多様化と地域における人間関係の希薄化などの原因により、育児・子育てに関して悩みや不安を抱えた家庭の親たちを学校や地域社会で支援することの必要性も指摘されるようになってきた（文部科学省，2015）。実際、欧米においては、コミュニティ心理学の発想をもとに、学校を基盤として地域における子どもの問題の予防や家庭教育を推進しようとするアプローチ（school-based approach: 小泉（2002））や、学校が子どもの学習・健康面の支援だけではなく、子どもの家族の生活面での福祉的な支援も行う「フルサービス（型）・コミュニティ・スクール」の設置（青木，2002）などの取り組みがなされている。日本においても、たとえば地域の「家庭教育支援チーム」等による訪問型の家庭支援など、家庭教育への積極的な支援が進められるようになってきた。

その一方で、「モンスターペアレント」現象をはじめとして、学校教師と親の教育に対する意識のずれ（尾木，2008）など、学校と家庭が連携を行なっていく上で必要なはずの相互理解に対して阻害要因となるものも存在している。従って、学校が今後子どもの学習・発達環境としての家庭を積極的に支援していくためには、親・保護者に学校に対する理解を求めるだけでなく、学校や教員、スクールカウンセラーが、家庭での育児・子育てにおいて何が問題となり、親たちがどのようなことに悩み・不安を感じるのかについて理解していくこともまた重要になる。

家庭における育児・子育て上の悩み・不安に関する先行研究を概観すれば、学童期以降の子どもの親についての研究よりも、乳幼児期についてのものが多い（岩田，1997a）。子どもの就学以降の子育て上の悩

a) 理学部第一部 教養学科　b) 教育支援機構 教職教育センター　c) 白百合女子大学大学院 文学研究科

みは、乳幼児期のそれとは様々な違いが存在すると考えられるが、共通点もある。たとえば、子どもが3歳時点と小学校入学後における母親の育児・子育て不安について調査した岩田（1997b）では、就学前後での不安の違いを指摘しつつも、現代の母親たちが社会的に孤立しがちである一方で、育児に関する情報や知識は氾濫しているために、母親たちが育児を行っていくための標準（スタンダード）を見いだしにくくなり、結果として育児の標準を「他児との比較」や「情報や育児・教育サービス」（たとえばメディアなどで早期教育の必要性が喧伝されると、早い時期から習い事に通わせなくてはならないと考える、など）に求めることにより、さらに「育児不安」を高めてしまうという「育児不安のプロセス」を指摘しており、こうした不安が生じる「構造」自体は、就学前後で変化しているわけではない。従って、乳幼児期の母親の悩み・不安を「構造」的に理解していくことは、乳幼児期以降の子育てを考える上でも有用な知見を提供するものと考えられる。また、育児不安について研究する場合に、母親が子どもへの否定的感情を語りやすい時期として、子どもの自己主張が激しくなる2歳から3歳頃について調査を行うものが多い（菅野，2001）。しかしながら、就学期以降の子育てにおける親の悩み・不安との連続性を視野に入れた知見を提供する上でも、3歳以降の時期も含めた長いスパンでの調査を行うことは必要であると思われる。

そこで本研究では、子どもが2歳0か月から5歳1か月までの、日常における子どもの自己制御（自己主張・自己抑制）的行動についての母親の語りの中から、母親の育児に関する悩み、不安やストレスについての語りを抽出したうえで、そうした育児に対する困難感が生じる潜在的な構造についても考察を行う。なお、母親が育児に関連して持つネガティブな感情を伴う考えについては、「育児不安」（牧野，1982）、「育児ストレス」（佐藤・菅原・戸田・島・北村，1994）、「育児困難感」（申・山田・森岡，2015）、あるいは妊娠期から出産前後における「マタニティーブルー」（松岡・加納，2010）などの様々な概念を用いて研究が行われている。吉田（2012）は、こうした概念的に多様化の状況にある育児不安に関する研究を、研究者の立場の点から、①子どもの授乳や睡眠，排泄等に関する具体的な心配事としてとらえる立場、②育児にまつわるストレスとしてとらえる立場、③育児に限らず家事や生活の総体から産み出される母親の生活ストレスとしてとらえる立場、④母親が育児に関して感じる疲労感、育児意欲の低下、育児困難感・不安としてとらえる立場、という4つのタイプに分類している。このように、母親の育児に関するネガティブな感情やその原因を客観的な立場から検討する場合、多様な概念間の整理が必要な状況であるが、本研究では、概念間の厳密な定義・整理には踏み込まず、母親の語りの中に見られる「素朴な」困りごとを表すものとして「悩み・不安」という用語を用い、分析を行うこととする。

方　法

1. 調査協力者

東京都在住の2歳前後の子どもとその母親を対象として調査協力を依頼し、協力の承諾を得た7組の母子（男児4名、女児3名）に調査を実施した。調査・分析対象児はすべて調査実施時点においては末子であり、そのうち3名は第二子、2名は第一子であり、第三子と第四子がそれぞれ1名であった。また、母親は、5名が専業主婦、2名が有職者であった。各調査協力者（母子ペア）の属性については、表1のとおりである。

表1 各母子ペアの属性

母子ペア	調査開始時年齢	性別	母親の職業	兄弟姉妹の有無	2歳0か月～2歳11か月までの調査回数	3歳0か月～3歳11か月までの調査回数	4歳0か月～5歳1か月までの調査回数
A	2歳 7か月	男	専業主婦	姉2人、兄１人	4	8	5
B	2歳 2か月	女	専業主婦	兄1人、姉1人	8	6	4
C	2歳 0か月	男	専業主婦	姉	9	6	4
D	1歳11か月	男	専業主婦	姉	7	4	4
E	1歳10か月	男	有職者	－	7	5	4
F	1歳10か月	女	専業主婦	姉	8	3	－
G	2歳 3か月	女	有職者	－	6	6	4

2. 調査方法

上記７組の母子に対して、調査対象児が２歳０か月前後から（親子ペアＡについては２歳６か月から）子どもが５歳１か月頃にいたるまでの期間(親子ペアＦについては３歳４か月まで)、子どもの自己制御(自己主張・自己抑制）の発達的変化について調べることを目的として、縦断調査を実施した。調査内容は実験前のインタビュー（日常インタビュー)、実験、実験後のインタビュー（実験についての振り返りインタビュー）の３つのフェーズにより構成されていた（調査内容については、竹尾・渡辺・渡部（2015）を参照)。本研究では、それらの調査内容の中でインタビュー調査（日常インタビュー）の分析結果について報告する。調査は開始時から３歳６か月にかけては、およそ１か月半に１度のペースで、その後は３か月に一度のペースで調査を実施し、４歳７か月の調査後は６か月後の５歳１か月に最終の調査を行った。なお、インタビュー時の録音については調査対象者である母親の了承を得て行った。

3. 分析方法

(1)「話題」の設定

文字化された母親のインタビュー時の語りの内容を、そこで語られている話題のテーマや具体的エピソードごとに「話題」として分割した。すなわち､各回のインタビューは複数の「話題」(テーマやエピソード）から構成されることになり、以下で述べる分析はこれらの「話題」を分析の単位として進められた。

(2) コーディングの手順とカテゴリーの設定

インタビュー調査においては、主に子どもの自己制御（自己主張・自己抑制）的行動についての聞き取りを行ったが（インタビュー時の質問項目については、渡辺・竹尾・渡部・高橋（2016; 2017）を参照)、本研究では自己制御的行動に関して母親が語る際に同時に語られている「育児に関する悩み・不安」についての母親の語りを分析対象とした。

母親の育児上の悩み・不安に関連した内容を含む各「話題」において、語りの中に見られる内容を、やや抽象度の低いカテゴリーである「下位カテゴリー」としてボトムアップに抽出し、同時に各「話題」を単位に、「下位カテゴリー」を用いてコーディングを行った。さらに、下位カテゴリー間の内容の関連性にもとづいて、それらの下位カテゴリーを包括的に扱う上位概念として、抽象度を上げた形で「上位カテゴリー」としてまとめた。カテゴリーをより抽象度の高い上位のカテゴリーや側面へとまとめ上げる過程においては､単に下位のカテゴリー名の表面的な類似性からカテゴリーをまとめることにならないように、データ自体を参照し、語りの流れを確認しながら分析を行った。これらの分析（語りについてのコーディング）では、NVivo 10 を援用した。

結果と考察

1. 育児上の悩み・不安の対象と心理的要因

表２は、母親たちが育児を行う上で、どのような事がらについて悩みや不安を抱いているのか（悩み・不安の対象）という点から母親たちの語りをコーディングしたものである。話題数の総計（表中最右列の数値）から見れば、表２における 17 の上位カテゴリーのうち、話題数が多いのは「子どもの将来の社会生活に関する不安・悩み」(14：以下括弧内の数字は話題数の総計を示す)、「子どものための時間の確保・調整の問題」(12)、「育児方法についての悩み」(10)、「子どもを理解することに関する不安」(8)、「幼稚園・保育園についての悩み」(7）であった。また、これらの上位カテゴリーのうち、「子どもの将来の社会生活に関する不安・悩み」、「子どものための時間の確保・調整の問題」、「育児方法についての悩み」については母親のうち過半数（４名以上）が悩み・不安として語っており、これらは母親の育児上の悩みの対象として特に語られやすいものと言える。

これら 17 の上位カテゴリーのうち「育児方法についての悩み」を除けば、その他のカテゴリーをさらにいくつかの観点から大きく分類することも可能である（表 2 中「他者関係」から「育児支援」までの列）。ひとつの分類上の観点は、上位カテゴリーの内容（悩み・不安）が母子以外の他者と母子との間の関係についての悩み・不安を含んでいるかどうかという点（以下では「母子と母子以外の他者との関係についての悩み・不安」に関する「観点」とする）であり、それに関連するカテゴリーには、「他の母親との関係についての悩み」(5)、「育児に関する周囲の目を気にしての悩み」(2)、「人間関係の変化による悩み」(2) がある。また、子どもについての悩み・不安が内容的に含まれているかどうかという点（以下では「子どもに対する悩み・不安」の観点とする）から見れば、関連するカテゴリーには、「子どもの将来の社会生活に関する不安･悩み」(14)、「子どもの性格･特徴に関する悩み」(4)、「子どもの自己主張に関する悩み･ストレス」(4) がある。さらに、母親自身についての悩み・不安が内容的に含まれているかどうかという点（「自分に対する悩み・不安」の観点）では、「母親の心理的余裕についての悩み」(2)、「社会的時間調整についての悩み」(1)、「母親の自己犠牲に関する悩み・ストレス」(1) といったカテゴリーがそれに当てはまる。最後に、母親に対する育児支援に関連した悩み・不安であるかどうかという点（「育児支援に関する悩み・不安」の観点）では、「幼稚園・保育園についての悩み」(7)、「家族による育児支援が無いことからくる悩み・不安」(1) が当てはまる。

これら 4 つの観点は、いくつかの上位カテゴリーに対しては複数のものが当てはまる場合もあり、「子どもと他の子との関係についての悩み」(2)、および「他の子どもとの比較による悩み」(1) については、「母子と母子以外の他者との関係についての悩み・不安」と「子どもに対する悩み・不安」が、「子どものための時間の確保・調整の問題」(12)、「子どもを理解することに関する不安」(8)、「長時間子どもと向き合うことによる悩み･ストレス」(3) については、「子どもに対する悩み･不安」と「自分に対する悩み･不安」が同時に当てはまる。

表２　母親の育児上の悩み・不安

上位カテゴリー	他者関係	対子ども	対自分	育児支援	下位カテゴリーの例	A	B	C	D	E	F	G	計
他の母親との関係についての悩み(0/0/5)	○				子どもの行動に対する母親同士の気遣いについて(0/0/4),専業主婦と働いている母親との関係の違い(0/0/1)	0	4	0	0	1	0	0	5
育児に関する周囲の目を気にしての悩み(0/1/1)	○				周囲の目を気にしてしまう(0/0/1),怒鳴っている母親だと見られるのだろうか(0/1/0)	0	0	1	0	1	0	0	2
人間関係の変化による悩み(0/0/2)	○				仲のいい友だちと離れて母親もショックだった(0/0/2)	0	0	0	0	2	0	0	2
子どもと他の子との関係についての悩み(1/0/1)	○	○			子どものいざこざに対しては自分のこと以上に気になってしまう(0/0/1),友だちに迷惑をかけないかどうか(1/0/0)	0	1	0	0	0	1	0	2
他の子どもとの比較による悩み(0/0/1)	○	○			他の子どもと比較して気になることが増える(0/0/1)	0	0	0	0	1	0	0	1
子どもの将来の社会生活に関する不安・悩み(7/6/1)		○			将来集団行動に入ったときにうまくやれるかどうかについての不安(3/0/0),入園までにできるようにしないといけないことができるようになるかどうか不安(0/2/0),問題児のレッテルを貼られたら大変だ(0/1/0),幼稚園に行ってからの子どもについての不安(4/3/1)	3	4	3	3	1	0	0	14
子どもの性格・特徴に関する悩み(0/1/3)		○			運動はすごいが勉強が苦手で大丈夫かなと思う(0/0/1),興味があることは勝手に覚え、ないことには見向きもしない(0/0/2),同年代の友達との関わりが少ないように感じる(0/1/0)	0	0	2	1	1	0	0	4
子どもの自己主張に関する悩み・ストレス(0/3/1)		○			子どもに振り回されてイライラする(0/1/0),子どものわがままと向かい合うのは大変(0/1/0),子どもの自己主張が続くと追い込まれてしまう(0/0/1),子どもへの対応で神経が疲れる(0/1/0)	0	0	2	0	2	0	0	4
子どものための時間の確保・調整の問題(4/6/2)		○	○		もっと子どものために時間を取りたい(3/0/0),一緒にひとつのことをやる時間があまりない(0/2/1),兄弟姉妹との時間の使い方・調整が難しい(0/0/1),仕事と子育ての両立について(0/4/0),時間と子どもの気持ちの間での葛藤(1/0/0)	0	1	0	1	0	3	7	12
子どもを理解することに関する不安(0/8/0)		○	○		子どもの反応に混乱している(0/3/0),子どもの変化が急すぎてついていけない(0/4/0),反抗のスイッチがどの瞬間に入るのか分からない(0/1/0),本当は子どもが母親のことを好きじゃないのではないか(0/1/0)	0	0	1	0	7	0	0	8
長時間子どもと向き合うことによる悩み・ストレス(1/2/0)		○	○		ずっと子どもといると疲れる(1/0/0),一人になりたい(0/2/0)	0	1	2	0	0	0	0	3
母親の心理的余裕についての悩み(0/0/2)			○		その場を収めるのにいっぱいで成長を認める余裕がない(0/0/1),生活・子育てに余裕がない(0/0/1)	1	0	0	0	1	0	0	2
社会的時間調整についての悩み(0/1/0)			○		子どもがいると時間を守りたくてもできない・仕方ない(0/1/0)	0	0	1	0	0	0	0	1
母親の自己犠牲に関する悩み・ストレス(0/1/0)			○		子育てで自分を犠牲にして我慢するのはしんどい(0/1/0)	0	1	0	0	0	0	0	1
幼稚園・保育園についての悩み(0/3/4)				○	幼稚園が合っているかどうかわからない(0/1/0),幼稚園で子どもに起こったことはわからない(0/2/3),幼稚園はプログラムが物足りず退屈(0/1/0),幼稚園を変えた方がいいのだろうか(0/0/1)	0	3	0	0	2	0	2	7
家族による育児支援が無いことからくる悩み・不安(0/1/0)				○	母親一人で全てをみるのはイライラする(0/1/0)	0	0	1	0	0	0	0	1
育児方法についての悩み(3/3/4)					ご褒美を与えているのでご褒美を常に要求する子どもになったら嫌だ(1/0/0),どうすれば早く動いてくれるか常に考えている(0/0/1),育児書の指摘と現実の乖離による悩み(0/0/1),先生はどうやって子どもを思い通りにさせているのか(0/0/1),怒ったあとで反省する(2/0/0),物で釣ることへの迷い(0/2/1),幼稚園の指導を実践したいが難しい(0/1/0)	2	0	1	1	2	1	3	10

（注１）表中括弧内のスラッシュで区切られた数値は、順に子どもが２歳台、３歳台、４歳以降における母親の語りの話題数を示している。
（注２）表頭の「他者関係」は「母子と母子以外の他者との関係についての悩み･不安」､「対子ども」は「子どもに対する悩み･不安」、「対自分」は「自分に対する悩み・不安」、「育児支援」は「育児支援に関する悩み・不安」をそれぞれ表し、表中の丸印はそれぞれの上位カテゴリーの内容が、それらの観点を含んでいることを表す。

2. 母親の悩み・不安の変化と母子をとりまく環境

母親の悩み･不安に関する語りの内容の子どもの発達にともなう変化について言えば、全体的に見れば、子どもの年齢段階（2 歳台、3 歳台、4 歳以降）間での、母親の育児上の悩み・不安についての語りの変化（話題数の変化。各表中のスラッシュで区切られた括弧内の数値を参照）に明確な傾向性のようなものは見られない。ただし、上位カテゴリーによっては、年齢段階間で一定の特徴を持った話題数の変化も見られるものもあり、それらは母子が置かれている環境の変化を反映している。たとえば「子どもの将来の社会生活に関する不安・悩み」（7/8/1：以下、括弧内の数字は、それぞれ 2 歳台 /3 歳台 /4 歳以降における話題数を順に示す）については、4 歳台に入って話題数が極端に減り、逆に「幼稚園・保育園についての悩み」（0/3/4）が 3 歳台以降に増加しており、3 歳以降幼稚園や保育園に子どもが通園しはじめることによって、母親の（将来的な）不安から現実の園への適応や園での教育の問題へと移行していくことが分かる。同時に「他の母親との関係についての悩み」（0/0/5）のように、子どもが家の外に出ていくことによって、母親同士の付き合いの頻度、あるいは関係のあり方が変化し、それによって母親間の人間関係も悩み･不安の要因となっていくことが分かる。

3. 母親自身の悩み・不安のコントロールの必要性の認識とコントロールの方法

上記のような母親の悩み・不安、あるいはそれによって生じるストレスに対しては、実際に母親自身が直接「母親自身の心のコントロールの必要性」について語る場合もある（表 3）。これらの語りの内容を見ると、母親たち自身が、子どもへの悪影響を懸念して、あるいは子どもの自己主張に対して自らの対処資源（労力や体力、心理的状態など）に限界があることを自覚して、何らかの心理的な調整が必要と感じていることが分かる。

表 3　母親自身の心のコントロールの必要性

下位カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	計
気持ちの切り替えをうまくしなければいけない(0/3/1)	0	0	0	0	1	0	3	4
イライラすると子どもに伝染してしまう(2/0/0)	0	0	0	0	2	0	0	2
イライラすると褒めるより怒る方が多くなる(0/1/0)	0	0	1	0	0	0	0	1
子どものわがままを全て受け入れるのは無理(0/1/0)	0	0	1	0	0	0	0	1
母親自身の対処方法を相談しないとエスカレートしそう(0/1/0)	0	0	0	0	1	0	0	1

（注）「母親自身の心のコントロールの必要性」については（表 3）、母親の語りの数が少ないため、特に上位カテゴリーにまとめることはせず、下位カテゴリーを話題数の順に並べた。

また、表 4 に、そうした悩み・不安をコントロールする方法について母親によって語られた内容をまとめた。母親が、悩み・不安をコントロールするためにどのような相手・機関に相談しているか、という視点から下位カテゴリーを整理すると（表中「相談先･調整者」の列。特に相談せず､母親自身で調整を行っている場合には､「母親自身」としてまとめた）、母親の悩みのコントロールを支援する相談相手は、同時に悩み・不安の対象について検討した際に見られたように（表 2 参照）、悩みを生じさせる人間にもなっていることが分かる。すなわち、幼稚園・保育園に子どもが通うことで母親の負担が軽減する一方で、幼稚園・保育園は母親の悩みを生み出す源にもなる（表 2 の上位カテゴリーで言えば、「子どもの将来の社会生活に関する不安・悩み」、「幼稚園・保育園についての悩み」、また、「育児方法についての悩み」における下位カテゴリー「幼稚園の指導を実践したいが難しい」）。他の母親との間で育児について共感し合うことが心理的なケアにもなると同時に、母親同士の関係調整が悩みの種にもなる（表 2「他の母親との関係についての悩み」）。また、書籍からの育児情報は、母親に生じるストレスのポイントを自覚させるツールにもなっているが、同時に「育児書の指摘と現実の乖離による悩み」（表 2「育児方法についての悩み」下位カテゴリー）を生じさせ、父親は相談相手になると同時に、育児支援を積極的に行わないと母親に感じられる場合にはストレスの源になる（表 2「家族による育児支援が無いことからくる悩み・不安」）。

表４　母親自身の心のケア・ストレスコントロールの方法

相談先・調整者	下位カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	計
外部機関	外部の助けを利用することがブレーキになる(0/0/0)	0	0	0	0	1	0	0	1
	子どもが幼稚園に行くと少し時間の余裕が自分にできる(1/2/1)	0	0	1	2	1	0	0	4
	相談機関を利用した(0/1/0)	0	0	0	0	1	0	0	1
他の母親	母親同士の共感が力になる(0/0/1)	0	0	0	0	1	0	0	1
書籍	本を読みストレスが起こるポイントを観察する(0/0/1)	0	0	0	0	1	0	0	1
父親	父親にストレスを聞いてもらってスッキリする(0/0/1)	0	1	0	1	0	0	0	2
不特定の他者	母親はもっとほめられるべき(1/0/0)	0	1	0	0	0	0	0	1
母親自身	子どものわがままに対して母親も打ち返す(0/1/0)	0	0	1	0	0	0	0	1
	子育てはいいことばかりではないと思えば受け止められる(0/1/0)	0	0	0	0	1	0	0	1
	手を抜かないとやっていられない(1/0/0)	0	1	0	0	0	0	0	1
	男の子は別次元のカブトムシ程度だと思えばいい(0/0/1)	0	0	0	1	0	0	0	1

総合考察

今回の結果をまとめれば、育児における母親の悩み・不安についての語りを下位カテゴリーとしてコーディングし、その内容に基づいてより抽象度の高い上位カテゴリーにまとめた結果、母親たちの悩みや不安、ストレスの対象（本研究の結果の中では表２において「上位・下位カテゴリー」として抽出されたもの）は、大きく分けて 17 の上位カテゴリーに分類することができた。また、それらの上位カテゴリーの内容は、「母子と母子以外の他者との関係についての悩み・不安」、「子どもに対する悩み・不安」、「自分に対する悩み・不安」、「育児支援に関する悩み・不安」の４つの観点からおおまかに分類することができた。

これらの悩み・不安の対象や要因の中には、特に今回の調査において初めて得られたものではなく、先行研究においてもしばしば見られるものも多い。ただし、調査対象となった子どもの発達段階に応じて先行研究との違いも見られる。たとえば、今回の調査結果の中では、母子関係以外の多様な「人間関係上の問題」について語られており、これは比較的母子関係の中での問題が中心となる２歳以前の段階についての研究ではあまり見られないものと言える。また、すでに述べた吉田（2012）の分類に従えば、先行研究における「①子どもの授乳や睡眠、排泄等に関する具体的な心配事としてとらえる立場」に関連した悩みや不安、ストレスについてはあまり母親から語られることはなかった。これは、子どもの年齢が上がるにつれて、子どもの生理的・身体的な発達に関する事がらについての悩みが相対的に重要度を減じ、それに変わって、子どもの生活世界の範囲が広がることで（幼稚園・保育園に通い始めることなど）人間関係上の悩み・不安や育児の方向性についての悩み・不安が相対的に増加したものと考えることができる。また、そうした生活世界の広がりは、２歳台における子どもが社会生活に適応できるかどうかについての漠然とした不安から、具体的に保育園・幼稚園に適応できるかどうかの問題へと心配事が移行することにもつながっていた。従って、２歳台以降の母親の育児上の悩み・不安については、母子間の関係調整だけの問題ではなく、さらに広い文脈の中で生じるものとしてとらえていくことが必要と思われる。また、今回の結果から考えれば、学校段階以降の母子関係についても、同様に単に母子関係のみの問題としてとらえるのではなく、母子をとりまく人間関係なども含めて考えていく必要性を指摘できる。

また、上位カテゴリーが４つの人間関係に関わる観点から分類可能な点についても、母親の悩みや不安が、人間関係上の調整や葛藤の中で生じる可能性の高さを示している。同時に、表４において育児不安のコントロール方法について見た際に示されたように、表２において母親の悩み・不安の対象となっていた

ものは、表 4 においては母親を育児において支援するものに（少なくとも一部は）重なっていると言える。たとえば、表 2 における「他の母親との関係」は表 4 の相談先・支援者の中の「他の母親」に対応し、表 2 における「幼稚園・保育園についての悩み」は表 4 の下位カテゴリーにおける「子どもが幼稚園に行くと少し時間の余裕が自分にできる」に対応している。つまり、別の視点から考えれば、こうした悩み・不安が生じている人間関係を、母親が悩みを断ち切るために思い切って捨てるわけにはいかないのは、これらの関係からなる構造が同時に育児の負担を軽減してくれる可能性を持っている（ように母親には見えている）からだと考えられる。その意味では、そうしたある種の「しがらみ」とも言える母子をとりまく関係の構造からは離れたところにある「外部の機関」（表 4 参照）が相談役として果たす役割の大きさを指摘することができる。また、学校段階以降の母子関係に対して学校側からの何らかの働きかけを行う際にも、問題となる状況の中で、学校がそうした「しがらみ」の側に位置するのか、「外部機関」の側に位置するのかについて見きわめながら対応を行うことが重要であると思われる。

謝　辞

本研究の長きにわたる調査に快くご協力くださいましたお子様とお母様、そしてご家族の皆様に心より感謝いたします。

注

1）本研究は JSPS 科学研究費補助金（課題番号：21730527 研究代表者：竹尾和子）の助成を受けて行われたものである。

引用文献

青木紀（2002）．アメリカにおける教育と福祉の連携：フルサービス・コミュニティ・スクール．北海道大学大学院教育学研究科紀要 , **85**, 157–169.

岩田美香（1997a）．「育児不安」研究の限界：現代の育児構造と母親の位置．教育福祉研究 , **3**, 27–34.

岩田美香（1997b）．縦断調査から見た「育児不安」の性格 . 北海道大學教育學部紀要 , **74**, 23–48.

上村惠津子・石隈利紀（2010）．教師が行う保護者面談に関する研究の動向と課題．信州大学教育学部研究論集 , **3**, 127–140.

小泉令三（2002）．学校・家庭・地域社会連携のための教育心理学的アプローチ アンカーポイントとしての学校の位置づけ．教育心理学研究 , **50**（2), 237–245.

牧野カツ子（1982）．乳幼児をもつ母親の生活と育児不安．家庭教育研究所紀要 , **17**, 14–21.

松岡悦子・加納尚美(2010)．出産時の医療介入とマタニティーブルーズとの関連の検討．母性衛生 , **51**(2), 433–438.

文部科学省（2015）．平成 27 年度文部科学白書．日経印刷.

尾木直樹（2008）．アンケート調査報告「モンスターペアレント」の実相．法政大学キャリアデザイン学部紀要 , **5**, 99–113.

佐藤達也・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則（1994）．育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 . 心理学研究 , **64**（6), 409–416.

申沙羅・山田和子・森岡郁晴（2015）．生後 2 ～ 3 か月児がいる母親の育児困難感とその関連要因．日本看護研究学会雑誌 , **38**（5), 33 -40.

菅野幸恵（2001）．母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ . 発達心理学研究 , **12**（1）, 12–23.

竹尾和子・渡辺忠温・渡部朗代（2015）．母子の共同発達過程の一側面としての幼児の自己制御機能の発達：理論的枠組と方法 , そこから見えてくるもの．東京理科大学紀要（教養編), **47**, 267-283.

渡辺忠温・竹尾和子・渡部朗代・高橋登（2016）．母親の語りに見られる２歳児の自己制御的行動と母親の対応行動．大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 教育科学，65（1），75-87.

渡辺忠温・竹尾和子・渡部朗代・高橋登（2017）．母親は２歳児の自己制御行動をどのように説明するか－母親の語りから見る子どもの自己制御行動と母親の対応行動の理由－．大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 教育科学 , 65（2）, 197-211.

吉田弘道（2012）．育児不安研究の現状と課題．専修人間科学論集 心理学篇 , 2, 1–8.